様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９－１、Ｚ－１９　（共通）

科学研究費助成事業　　研究成果報告書

令和　元 年　 ６ 月　 ３ 日現在

機関番号：３２６２１
研究種目：基盤研究(B)（一般）
研究期間：2016～2018
課題番号：１６Ｈ０３５３１

研究課題名（和文）地中海周辺域における聖者・聖遺物崇敬の人類学的研究

研究課題名（英文）Anthropological Studies on Veneration of Saints and Holy Relics in the Mediterranean World

研究代表者
赤堀　雅幸（Akahori, Masayuki）

上智大学・総合グローバル学部・教授

研究者番号：２０２７０５３０

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費）　　13,500,000円

研究成果の概要（和文）：アブラハム的宗教における多様な存在への信仰である「崇敬」の諸相を学際的に研究する共同研究の手始めとして、地中海周辺域を対象地域として調査・研究を実施し、論点の整理を図った。個別の調査に加え共同調査を実施し、研究会、研究合宿、国際ワークショップを重ねた。結論として、聖者・聖遺物崇敬が唯一神信仰を補完して、信条の全体を現実の人々の生活と摺り合わせるものであるとの仮説を導き、同時にイスラームとキリスト教では崇敬が、聖者の血統や聖遺物とヒトの身体との関わりについて大きく異なる点にも注目することとなった。成果は第5回中東研究世界大会で2パネルを組織して発表し、さらに論集の刊行に向けて準備を進めている。

研究成果の学術的意義や社会的意義
崇敬が神と人をつなぐ不可欠の内在的な要素として、絶対的唯一神への崇拝に対抗し補完する役割を担っているという仮説を得た本研究は、聖者と聖遺物を崇敬概念の下に総合的に捉える人類学の研究として初の試みであり、また民衆的な実践における信仰のありようの共通性を浮き彫りにすることを通して、グローバル化する現代における信仰の形を、原理主義などの宗教の政治化とは別の側面から見るという特質も有している。研究手法の面では、人類学、思想研究、歴史学が交錯し啓発しあう共同研究のひとつの範型として、本研究の展開と成果を広く示すことにも意義があった。

研究成果の概要（英文）：This project is to be regarded as the first stage of our long-term joint interdisciplinary study of the veneration of saints and holy relics in the Abrahamic religions. Limiting the subject of the study to the geographical regions that surround the Mediterranean Sea, we conducted field research and held seminars and international workshops so as to deepen the mutual understanding of our research members as well as to marshal discussion points for future research. While we developed a hypothesis that the veneration of saints and holy relics plays a complementary role of adjusting people's religious lives to the monotheistic creeds of Islam and Christianity in common, we also focused on the significance of the holy genealogy of saints in Islam and of the inclusion of saints' physical remains in relics in Christianity. To present the results of our research, we organized two panels at the fifth World Congress for Middle Eastern Studies held at the University of Seville in July 2018.

研究分野：人類学、イスラーム地域研究

キーワード：宗教　儀礼　崇敬　聖者　聖遺物　地中海　イスラーム　キリスト教

１．研究開始当初の背景

ユダヤ教的伝統（ヘブライズム）を継承しつつ世界宗教へと展開したキリスト教とイスラームは、超越的唯一神を崇拝（worship）する一方で、神ならざる多様な存在への信仰として、聖者や聖遺物に対する「崇敬（veneration）」を人々の間に生み出してきた。研究代表者である赤堀が研究分担者である東長とともに平成 9 年度から推進してきたスーフィズムと聖者崇敬に関する共同研究は、人類学、思想研究、歴史学の協働によるこの分野の総合理解の確立を狙いとしており、東長によるスーフィズム三極構造論や赤堀によるスーフィズム･聖者崇敬複合論を提起し、複数の論集刊行や国際会議での発表によって成果の周知に努めてきた。同時に、これまでの研究が、イスラーム以外の諸宗教に適用できる可能性についても一定の検討を加えており、キリスト教にまで視野を広げて聖者崇敬に関する実証的共同研究を実施する状況は、研究蓄積からいって充分に整っていた。

さらに、聖者崇敬と結びついて今日的重要性をもつ信仰実践として、共同研究はこれまでも聖遺物崇敬とその複製利用の問題にも目を向けてきた。聖遺物が近年のムスリム民衆を惹きつけていることは調査現地でしばしば感じられることだが、イスラームの聖遺物に関する研究はまだ端緒に就いたばかりと言わなくてはならず、キリスト教のそれについても人類学分野では目立った研究はない。ここから、イスラームとキリスト教にまたがり、聖者崇敬と聖遺物崇敬を対象とする共同研究実施が可能であり、また必要であるとの判断にいたった。

２．研究の目的

スーフィズムとイスラームの聖者崇敬に関するこれまでの共同研究を基盤に、アブラハム的宗教において唯一神ならざる多様な存在への信仰としてある「崇敬」の諸相を、人類学を基盤に思想研究と歴史学の協働を得て調査し、新たな理論的枠組みを構築することを目指す。本研究はその手始めとして、両宗教がもっとも古くから相交わってきた地中海周辺域を対象地域に設定し、イスラームとキリスト教における聖者・聖遺物崇敬をめぐる調査を実施し、理論化への方向付けを探るとともに、研究完了後のより総合的な研究の展開に向けた共同研究組織を確立するものと位置づけた。同時に、伝統的な聖者・聖遺物崇敬との連続性に留意しつつ、具象化されたヒトやモノを焦点とした信仰の営みに、今日的なリアリティのある信仰の形を見て取ることで現代宗教論への貢献を期した。

本格的にイスラームとキリスト教の双方を含めた研究を実施し、聖遺物崇敬を大きく取り上げるのは研究代表者らにとって初めての試みであったため、共同研究参加者の研究状況について相互に理解を深め、論点を整理し、研究の方向性を策定して、個々の研究が全体として活かされるように調整する作業をまず手始めとした。その上で、研究開始時点での共同研究の着眼点としては下記を想定し、人類学者の調査を中核としつつも思想研究者から崇敬の思想上の位置づけ、歴史学者からは調査対象の歴史的展開についての知見の提供を受けることとした。

① 聖者および聖遺物の聖性の形成、持続、変容
② 聖者および聖遺物による神とヒトとの媒介
③ 唯一なる神と多様な聖者・聖遺物の間に見られる対抗関係と相補関係
④ 物象化された聖者と人格化された聖遺物など、聖者と聖遺物の関係
⑤ 聖者とイコン、その複製、聖遺物とその複製との関係、また複製の生産、流通、消費

３．研究の方法

研究の目的を十全に達成するために、(1) 分野的、地域的にバランスの取れた研究組織を形成して、(2)研究会および研究合宿の着実な積み重ねを活動の中核とし、これに(3)個別現地調査による各個の研究の深化、(4)共同現地調査の実施による知識と関心の共有を組み合わせた。また、(5)国内所蔵のない関連文献・資料の収集に努め、(6)先行研究の整理を行い、(7)将来的に共同研究への参画が望ましい専門家の国内外に及ぶ研究ネットワーク形成も進めた。(8)成果の発表と社会への還元の面では、国内外の学会での部会組織、講演会開催、学術誌上の特集、論集刊行を行うこととした。

(1) 研究組織：6 名の人類学者に 1 名の思想研究者、6 名の歴史学者を加えた 13 名からなる共同研究（うち 4 名が研究分担者、9 名が連携研究者）とし、大学院学生、若手研究者の育成も視野に多くの研究協力者の参加を促した。
(2) 研究会・研究合宿・ワークショップ：研究会は年間 2 回を予定し、これとは別に、1 泊 2 日の研究合宿、フランスの国利社会科学研究センター社会・宗教・ライシテ・グループ（CNRS-GSRL）との共催による国際ワークショップを毎年度開催することとした。
(3) 個別現地調査：個々の研究者が長期的な視野に立ってそれぞれの調査地で行っている調査と本研究の趣旨とを、事前に研究打ち合わせの中で摺り合わせ、あくまで共同研究の一環として、毎年度数名を各専門地域ないし調査経験のある地域に派遣することとした。
(4) 共同現地調査：特定の調査地にその地域の専門家とその地域を専門としない研究者を併せ

派遣する共同現地調査は、研究者を専門地域における常識から解き放ち、新たな視点で研究に取り組むきっかけを作り出すのに大きな効果があり、積極的に実施することとした。

（5） 文献収集：国内に所蔵のない聖者・聖遺物崇敬関連文献を収集し、上智大学および京都大学に所蔵することとした。

（6） 先行研究の整理：研究会、とくに研究合宿での読書研究会の実施などを経て、聖者・聖遺物崇敬に関する基本文献を押さえた文献目録の作成を行うこととした。

（7） 国内外に及ぶ研究ネットワーク形成：独自のウェブサイトの他、学会等のウェブサイト、メーリングリストを介して、関心と能力を兼ね備えた研究者に共同研究への参加を呼びかけ、さらなる人的資源確保を行うこととした。

（8） 成果公開：平成 30 年度開催の第 5 回中東研究世界大会でパネルを組織して全体としての成果発表を行い、これを元に令和元年度以降に日英語の論集を刊行することとした。また、本研究の趣旨が広く社会に周知されるべく、公開シンポジウムなども行うこととした。

４．研究成果

イスラームとキリスト教にまたがり、聖者と聖遺物を崇敬概念の下に総合的に捉える人類学の研究は、研究代表者らの知る限り国際的に見ても初めての試みである。言うまでもなく本質主義的観点からイスラームとキリスト教を類比もしくは対比する著作は枚挙に暇がないが、精密な現地調査を行い、文献資料を渉猟して、聖者・聖遺物崇敬の諸相を見通す視点を確立しようとした本研究は、むしろそれらの安易な議論を退けるのに有効であったと考える。また、本研究はキリスト教とイスラームの違いを超えて、民衆的な実践における信仰のありようの共通性を浮き彫りにする結果を導く面を持っており、それは宗教宗派対立や宗教の原理主義的側面に目が向けられがちな今日の研究状況を相対化すると同時に、それら対立を生み出す構造に対しては、生起する事件を追いかけるに留まらない複眼的視点を導入することを可能にするものだった。加えて、伝統的歴史的な崇敬の形から、情報技術を用いた聖者・聖遺物崇敬のあり方にまで目を向け、グローバル化する現代における信仰の形をそれまでとの継続と断絶の両面にわたってみることで、ポスト原理主義の時代における信仰の形についての考察も行うことができた。

翻って、本研究は、応募者が本来専門とし、長年にわたって続けてきたイスラームの聖者崇敬に関する人類学的研究をより豊かにするのにも有効であり、それは他の共同研究参加者についても同様に当てはまる。研究手法の面では、人類学、思想研究、歴史学が交錯し啓発しあう共同研究のひとつの範型として、本研究の展開と成果を広く示すことにも意義があった。

具体的な研究の実施状況と成果は以下の通りである。

（1） 研究組織：13 名中、キリスト教聖者・聖遺物崇敬研究強化の目的で、平成 29 年度に研究協力者（連携研究者）であった藤原久仁子を研究分担者に追加した。

（2） 研究会・研究合宿・ワークショップ：研究会は平成 28 年 7 月 9 日、10 月 2 日、平成 29 年 7 月 23 日、平成 30 年 4 月 13 日、平成 31 年 3 月 17 日に開催、研究合宿は平成 28 年 12 月 17～18 日、平成 29 年 11 月 11～12 日に実施、CNRS-GSRL との共催による国際ワークショップは平成 28 年 9 月 6 日（フランス）、平成 30 年 1 月 21～22 日（日本）、平成 31 年 3 月 2 日（フランス）に開催した。この他、平成 29 年 3 月 25 日には大学院生、若手研究者中心の国際ワークショップを実施し、適宜、研究打ち合わせ等も行った。

（3） 個別現地調査：研究代表者・分担者・協力者（連携研究者）らは研究期間中に本研究課題と関連した現地調査を様々な機会に実施しており、本研究資金からの支出では、平成 28 年度に森本をイラン、安田をエジプトに、平成 30 年度に安田をクウェイトに派遣した。

（4） 共同現地調査：平成 28 年度 8 月にはボスニア各地（赤堀、寺田、東長、新井、安田他 6 名＋現地での研究協力者 1 名）、平成 29 年度 8 月はローマおよびアッシジ（赤堀、寺田、東長、小牧、三沢他 6 名＋現地での研究協力者 1 名）、平成 30 年度 7 月にはサンティアゴ・デ・コンポステーラ（小牧、三代川他 4 名）で共同現地調査を実施した。

（5） 文献収集：各種の研究資金により本研究課題関連図書を購入し、上智大学アジア文化研究所の所蔵とした。一部は現時点では図書資料として研究代表者らの研究室で使用している。

（6） 先行研究の整理：研究代表者・分担者らで分担して先行研究の整理を進めたが、予定していて文献目録の公開にまではいたらなかった。

（7） 国内外に及ぶ研究ネットワーク形成：国内外の専門家との個別の協力の他、CNRS-GSRL、ウスキュダル大学スーフィズム研究所、米国神学大学院連合イスラーム研究所他との組織的な連携促進に努め、また大学院学生を中心に若手研究者の本研究への促進を促した。

（8） 成果公開：研究代表者・分担者・協力者らが各種の形で口頭発表や論考の発表を行った他、全体的な成果発表として平成 30 年 7 月にセヴィーリャで開催された第 5 回中東研究世界大会（WOCMES Seville 2018）で、Religious Practices Using Commodities in Consumer Societies と Visits to Saintly Places in the Age of Globalization の 2 パネルを組み、東長、藤原、小牧、三代川、安田他 8 名が発表を行った。その他、平成 28 年 10 月 22 日にイスタンブルのウスキュダル大学スーフィズム研究所が主催した国際シンポジウムで赤

堀、東長、丸山が口頭発表を、また平成 29 年 5 月 20～21 日に京都大学ケナン・リファーイー・スーフィズム研究センターが開催した国際シンポジウムの共催に加わり、赤堀、東長、新井、高橋、丸山、森本、安田の 7 名が発表を行った。学生、社会人向けの公開シンポジウムとしては、上智大学研究機構が開催する Sophia Open Research Weeks を格好の機会として、平成 28 年 11 月 19 日と平成 30 年 11 月 19 日に開催し、それぞれ 100 名弱の聴衆を集めた。令和元年以降には、これらの研究成果を日英語の論集等として刊行すべく準備を進めている。

本研究課題では、研究の相互理解と問題意識の共有、先行研究の評価などを重視したが、そこで得られた大きな仮説としては、崇敬が神と人をつなぐ不可欠の内在的な要素として絶対的唯一神への崇拝に対抗し補完する役割を担っているという考え方がある。この仮説を検証し、また研究期間中の議論で繰り返し取り上げられた複数の観点、すなわち、物象化された聖者と人格化された聖遺物の対比、聖遺物とのその複製の関係、聖者の血統をめぐるイスラームに特異な崇敬の展開、聖職者による祝福や聖像の多用他キリスト教に特異な実践などを論点として深めつつ、とくに現代の崇敬に注目し、対象地域を拡大して、本研究の主題に関する民族誌的知見を蓄積することに力点を置く新たな共同研究の展開を企図することとした。当該の共同研究は、令和元～5 年度科学研究費助成事業（科学研究費補助金）（基盤研究（A））「イスラームおよびキリスト教の聖者・聖遺物崇敬の人類学的研究」［JSPS 科研費 JP19H00564］として採択された。

５．主な発表論文等

〔雑誌論文〕（計 23 件）

1) 赤堀雅幸「暴力のイディオムとしての名誉：エジプト西部砂漠ベドウィンの血讐と名誉殺人を事例に」『文化人類学』査読有、82 巻 3 号、2017 年、367-385 頁 DOI:10.14890/jjcanth.82.3_367
2) 東長靖「ファナーの観点からスーフィズムを見直す」『東洋哲学研究』査読無、55 巻 1 号、2016 年、77-80 頁
3) Morimoto Kazuo, “A Mid-Fifteenth-Century Attestation of the Muhammad Shahi Isma‘ilis: Between Khudawand Muhammad and Shah Tahir Dakani,” *Orient: Journal of the Society of Near Eastern Studies in Japan*, peer-reviewed, no. 53, 2018, pp. 95-107, https://www.jstage.jst.go.jp/browse/orient/-char/ja

〔学会発表〕（計 126 件）

1) 今松泰「聖者を記述する：オスマン朝の場合」近現代の聖者に関する研究会主催シンポジウム「イスラーム世界を生きる聖者たち」2017 年
2) 赤堀雅幸「スーフィズム・聖者崇敬複合とスーフィズム三極複合論の民衆信仰軸」スーフィズム・聖者信仰研究会、2016 年
3) 東長靖「スーフィズム・タリーカ・聖者信仰複合と東南アジア・イスラーム」「ジャワ語テキストにみるジャワの宗教変容（2）ジャワのイスラーム化再考」研究会、2016 年
4) 東長靖「スーフィズムの三極構造論：スーフィズムの立場から」スーフィズム・聖者信仰研究会、2016 年
5) Akahori Masayuki, “Opening Remarks for the Panel PA-241 ‘Visits to Saintly Places in the Age of Globalization,’” 5th World Congress for Middle Eastern Studies, 2018
6) Fujiwara Kuniko, “Holy Water for a Subtle Flavor in Cooking and Relationships: Dimensions of the Daily Consumption of Religious Materials in Catholic Malta,” 5th World Congress for Middle Eastern Studies, 2018
7) Komaki Sachiyo, “The Cult of Islamic Relics and the Religious Goods in Contemporary India,” 5th World Congress for Middle Eastern Studies, 2018
8) Misawa Nobuo, “Sultan II. Abdulhamid ve Japonlar,” Vefatinin 100.Yilinda Sultan II.Abdulhamid ve Donem, Uluslararasi Kongresi, Istanbul, 2018
9) Miyokawa Hiroko, “The Discovery of the Pilgrim City of Abu Mena and the Revival of St Menas Veneration,” 5th World Congress for Middle Eastern Studies, 2018
10) Tonaga Yasushi, “Theoretical Basis for the Visit to the Saints’ Places in the Islamic Thought,” 5th World Congress for Middle Eastern Studies, 2018
11) Yasuda Shin, “Remembrance of Holy Places: Religious Capital and Syrian Shi’ite Religious Sites in the Era of Crisis,” 5th World Congress for Middle Eastern Studies, 2018
12) Akahori Masayuki, “Past, Present, and Future of Our Studies on Sufism and Saint Veneration,” 1st International Symposium of Kenan Rifai Center for Sufi Studies at Kyoto University, 2017
13) Arai Kazuhiro, “Saint Veneration in Indonesia and the Emergence of Hadrami Sada:

Shaping Historical Perception by Using the Current Situation?" 1st International Symposium of Kenan Rifai Center for Sufi Studies at Kyoto University, 2017

14) Miyokawa Hiroko, "The Rediscovery of St. Menas the Miracle Maker," "In partibus fidelium": Missions du Levant et connaissance de l'Orient chretien (XIXe-XXIe siecles), 2017
15) Terada Takefumi, "Filipino Popular Devotion Introduced into the Roman Catholic Church in Japan," International Conference on Japan and East Asia in the Midst of Change: Carving a Path for the Region, organized by De La Salle University and the Japan Foundation, 2017
16) Tonaga Yasushi, "Potentiality of Sufism in the Contemporary Period," KAMES International Conference, 2017
17) Akahori Masayuki, "An Anthropological Understanding of the Three-Axis Framework of Sufism: A Comparison to Shintoism, Japan's Traditional Religion," Opening Symposium for Education Program for Sufi Culture "The Bridge of Two Easts," 2016
18) Terada Takefumi, "Filipino Mothers and the Changing Faces of the Roman Catholic Church in Japan," American Academy of Religion, 2016
19) Tonaga Yasushi, "Past, Present and Future of Sufi Studies in Japan: Three-Axis Framework of Sufism and Interdisciplinary Approach," Opening Symposium for Education Program for Sufi Culture "The Bridge of Two Easts," 2016
20) Yasuda Shin, "Remembrance of Holy Places: The Network of Religious Capital and Risk Management in Shi'ite Religious Places in Syria," 8th Annual International Religious Tourism and Pilgrimage Conference, 2016

〔図書〕（計 31 件）

1) **小牧幸代、高崎経済大学地域政策学会『イスラーム復興と宗教商品をめぐるグローバルビジネス：現代南アジアにおける聖遺物信仰の再活性化とその背景』2016 年、12 頁**
2) **安田慎、ナカニシヤ出版『イスラミック・ツーリズムの勃興：宗教の観光資源化』2016 年、244 頁**
3) Tonaga Yasushi, Fujii Chiaki (editors), Arai Kazuhiro, Komaki Sachiyo, Maruyama Daisuke, Morimoto Kazuo, Takahashi Kei, Tonaga Yasushi, Yasuda Shin, , Carl W. Ernst et al. (contributors), Kyoto: Kenan Rifai Center for Sufi Studies, Kyoto University, *Islamic Studies and the Study of Sufism in Academia: Rethinking Methodologies*, 2019, 383 pp. (pp. 3-22, 47-54, 87-100, 139-150, 243-278 et al.)
4) Yasuda Shin, Razaq Raj (editors), Yasuda Shin, Abdus Sattar Abbasi, Achanzar-Labor et al. (contributors), Oxfordshire, UK: CAB International, *Religious Tourism in Asia: Tradition and Change through Case Studies and Narratives*, 2018, 186 pp. (pp. 1-9, 21-29)
5) Tonaga Yasushi (editor), Akahori Masayuki, Tonaga Yasushi, Osman Nuri Kucuk et al. (contibutors), Kyoto: Kenan Rifai Center for Sufi Studies, Kyoto University, *The Bridge of Cultures: Potentiality of Sufism*, 2017, 112 pp. (pp. iv-vi, 31-46)
6) Terada Takefumi (editor), Terada Takefumi, Corros, Fr. Edwin, Sugawara Marife et al. (contributors), Tokyo: Institute of Asian Cultures, Sophia University, *The Faces of Being Church among Migrant Filipinos in Japan*, 2016, 51 pp. (pp. 1-3) https://digital-archives.sophia.ac.jp/repository/view/repository/00000036129
7) Tonaga Yasushi (editor), Kyoto: Kenan Rifai Center for Sufi Studies, Kyoto University, *Bibliography of Sufism, Tariqa, and Saint Cult Studies in Japan*, 2016, 126 pp.

〔産業財産権〕

○出願状況（計 0 件）

○取得状況（計 0 件）

〔その他〕

研究成果公開ウェブサイト

上智大学イスラーム研究センター　http://dept.sophia.ac.jp/is/SIAS

スーフィズム・聖者信仰研究会　http://www.i-mazar.jp/web**（改修中）**

研究成果公開シンポジウム

上智大学イスラーム研究センター主催シンポジウム「中東に生きる宗教的少数派の人々：その暮らしと祭り」2018 年 11 月 10 日、上智大学

上智大学イスラーム研究センター主催シンポジウム「協調と融和のイスラーム：日本・中国・インドネシアの事例から」、2016 年 11 月 19 日、上智大学

６．研究組織

(1)研究分担者
研究分担者氏名：寺田　勇文
ローマ字氏名：（TERADA, takefumi）
所属研究機関名：上智大学
部局名：総合グローバル学部
職名：教授
研究者番号（8 桁）：20150550

研究分担者氏名：東長　靖
ローマ字氏名：（TONAGA, yasushi）
所属研究機関名：京都大学
部局名：大学院アジア・アフリカ地域研究研究科
職名：教授
研究者番号（8 桁）：70217462

研究分担者氏名：藤原　久仁子（森田　久仁子）
ローマ字氏名：（FUJIWARA, kuniko/MORITA, kuniko）
所属研究機関名：甲子園大学
部局名：栄養学部
職名：准教授
研究者番号（8 桁）：00464199

(2)研究協力者
以下は研究協力者のうち連携研究者として共同研究に参画した者の一覧である。

研究協力者氏名：新井　和広
ローマ字氏名：（ARAI, kazuhiro）

研究協力者氏名：今松　泰
ローマ字氏名：（IMAMATSU, yasushi）

研究協力者名：小牧　幸代
ローマ字氏名：（KOMAKI, sachiyo）

研究協力者名：高橋　圭
ローマ字氏名：（TAKAHASHI, kei）

研究協力者名：丸山　大介
ローマ字氏名：（MARUYAMA, daisuke）

研究協力者名：三沢　伸生
ローマ字氏名：（MISAWA, nobuo）

研究協力者名：三代川　寛子
ローマ字氏名：（MIYOKAWA, hiroko）

研究協力者名：森本　一夫
ローマ字氏名：（MORIMOTO, kazuo）

研究協力者名：安田　慎
ローマ字氏名：（YASUDA, shin）

※科研費による研究は、研究者の自覚と責任において実施するものです。そのため、研究の実施や研究成果の公表等については、国の要請等に基づくものではなく、その研究成果に関する見解や責任は、研究者個人に帰属されます。